

## 発刊にあたって

人にはさまざまな違い、多様性があります。体の特徴、性別、年齢、生まれたところ、国籍、民族など、違いを数えたらきりがありません。人は、多様な面を持っており、いくつもの違う立場を持ちながら、多くの人や社会と関わり暮らしています。だれ一人として同じ人はおらず、そこが人がかけがえのない存在といわれるゆえんです。

しかし、この違いによって、お互いが理解しあえなかつたり、意見がぶつかりあつたりすることがよくあります。そして、“この地域ではこれがあたり前”とか“同じ学校や職場なのだから同じことをするのが当然”とって同一性を重視すると、この違いによって、その人を否定し、差別したりしてしまうことにつながります。これが、不当な理由によってなされると、重大な人権侵害となっていきます。

“違いを認めあつてともに生きる”ということが人権を尊重する上で、いかに大切であるかということは徐々に知られつつあります。しかし、地域や職場、学校でそれを実現するためには、その違いを背景も含めて理解し、受け容れること。そして違いを尊重し、ともに生きていこうとする姿勢を持つこと。さらには、排除せずとともに暮らすための方法やルールをつくっていくことなどが必要になるのではないのでしょうか。これらを進めるためには、多様性を尊重する学習の積み重ねが大切になってきます。

人権学習シリーズVol.4『ちがいのとびら—多様性と受容—』は、多様性を尊重するための人権学習を進めることをねらいとしています。その学習を進めるための考え方と、地域や職場、学校などでの学習プログラムを紹介しました。そして、学習を進めるファシリテーター（促進役）のハンドブックとなるように作成しました。

多様性を尊重する人権学習によって、“違い”がプラスになる関係づくりや社会づくりにつながることを願っています。

## 冊子の構成

人権学習シリーズVol.4『ちがいのとびら—多様性と受容—』は、多様性という観点に立脚して新しい人権教育の方向性を指し示そうとしています。

まず、第1章では、基本的な考え方や概念を論じます。多様性を尊重する人権教育、多様性を学ぶための場づくり、感情とエンパワメント、自己開示とカミングアウトなどです。

第2章では、いくつかのアクティビティを組み合わせた学習プログラムの例を紹介していきます。ここで紹介するプログラムは、いずれも①私を知る、②背景を知る、③社会に働きかける、という流れで組み立てられています。学習プログラムのテーマとなっているのは、まず私たちの多様性に関連して、「多様な感情とその扱い」、「多様な見方・考え方」、「知ってる!知らない?わたしの立場」、「「ちがい」と「まちがい」」などとなっています。次いで、多様な立場の奥にある人権課題にアプローチする学習プログラムを位置づけています。「フツの感覚?」、「ガラスの天井を越えて」、「さ

まざまな性と生」、「ニートは困った人?」などです。さらに、さまざまな人権課題に共通する視点や概念を深めるプログラムがそれに続きます。「「うわさ」をよむ」、「これぞ不平等?」、「オークション体験で考える平等」といったプログラムがそれにあたります。

さまざまなテーマによる学習プログラムを知り、その土台にあるプログラム編成原理を身につけることによって、さまざまなアクティビティを使いこなしやすくなっていただけるものと期待しています。

その後の資料では、多様性の学習にかかわって参考となる資料を紹介しています。また、これまで財団法人大阪府人権協会が作成した、人権学習シリーズと『人権学習のプログラムづくり』も紹介しています。これらを手がかりにいただければ、多様性の学習を皆さんの手で発展させる道筋が見えてきやすいのではないかと思います。